

1. はじめに：私たちの問題意識

なぜ今、個性の問題をとりあげるのか。個性と言えば、日本で大ヒットしたSMAPの曲“世界に一つだけの花”（2003年発売）を思い浮かべる人も多いかと思う。また、ヤング世代で注目されている“パーソナル・カラー”（色で自分を知る）も個性に関わる現象である。個性重視は、まさに大きな社会現象のうねりの中にあり、現在、そして将来にわたってもこの潮流は続くと考えられる。例えば、教育の現場では、現在、大学の入試改革が進められているがその中で、“光る個性”という表現が登場する一方、企業経営においても、“個を活かす組織・経営”が強調されていることもその証左である。その理由として、インターネット等が全世界的に普及し、価値観が多様化する中で自分らしさとは何か、見失いがちとなり、個性が重視されるという時代背景があるということは疑いようのない事実である¹。また、学術的にも個性心理学という、新たな学問が登場する一方、脳科学等の発展により、学際的な研究対象としても、個性が注目されている。

しかし、我々がこの個性の問題に辿りついたのは、全く別の理由からである。それは、「共創空間開発学のすすめ」の本（麗澤大学出版会、2015年）でとりあげた2つのテーマ、グローバル教育と女性労働とをつなぐ接点とは何か、という問いであった。この問題について企画段階においてメンバー間でキャッチボールしながら模索してきたが、その中で浮かび上がってきた共通のキーワードこそが、個性であることに気づかされたからである。

個性重視と言われながら、そもそも個性とは何か、その問題および本質とは何か、という問い自体に向き合っていないのではないだろうか。

そこで、我々の今年度の目的とは、個性の問題について、グローバル教育の観点、および昨今注目されるダイバーシティ（多様性）の原型とも言える男女協働の観点から、「共創空間」の中でその問題の所在を明らかにし、仮説を構築・検証することによって、その本質を明らかにすることである。

2つの観点からアプローチするにあたっては、個性の何が問題なのか、またその原因とは何か、といった原因仮説の構築および仮説検証する手段として、「共創空間」開発技法（Co-creative Space Development Method, 以下CSD技法と略す）を活用する。CSD技法とは、グローバル教育および男女協働という現実的なテーマについて参加者全員が向き合うことによって、個性の問題とその本質を明らかにすることができる実践的な技法である。そして、この個性の価値および本質に関する発見プロセスは、「共創空間」に参加された方々全員だけではなく、この報告書を読まれるすべての方々と共有できるものである。

第2部の「グローバル社会の中の自分軸（個性）～教育現場から～」では、最初にCSD技法によって、「個性（自分らしさ）」を全員で考える。次に、山下美樹氏よりドキュメンタリービデオ等の教材も活用しながら、グローバル教育の問題点やグローバル社会の中で生きる個人の価値観および価値判断（自分軸）の問題が提示される。この問題提起をふまえて、CSD技法によって、グローバル社会の中で自分と向き合うこと、および自分とは異なる価値観を持つ他者（相手）と向き合うことの意義を明らかにする。同時に、グループワークによって、「共創空間」に登場した多様な個性（自分軸）をつなぎ、新たな共有知（shared value）を発見し、自分と他者（自分を映す鏡）に対する認識上の特徴を客観的に明ら

¹博報堂の「個性」に関する調査（全国の20～60歳の社会人および学生を対象とするインターネット調査、サンプル数556名、2014年11月実施）によると、個性は社会、自分自身にとって必要と答えた割合は、各々78.4%、54.3%であった。（東京大学教養学部・博報堂ブランドデザイン[2014]、4ページ）。

かにする。

第3部の「個性としての男らしさ・女らしさと男女協働～職場から～」では、CSD技法によって、個性として「男らしさ・女らしさ」を認識しているのか、またその仕事上での強み・弱みについて、明らかにする。その上で、露木かおり氏より、男女協働によるダイバーシティと個性の問題について、調査資料をもとに、国際比較もふまえ、その実態を明らかにする。同氏のプレゼンをもとに、職場において男女協働はうまくいっているのか、という問題を共創する。その際、この問題に対する認識は男女では必ずしも同じではないという立場に立ち、男性軸と女性軸による共創空間を開発する。そして、CSD技法に則り、グループワークを実施することによって、共有知 (shared value) としての男女協働の特徴的なパターンを発掘する。

第4部の「個性の本質と個性が真に輝く共創空間」では、個性について、以上の2つの観点から共創空間の中でアプローチ (問題探索および原因探索・検証) したことによって、得られた共有知の意味を掘り下げ、個性の全体像に迫る。また、「共創空間」で気づく個性の本質を指摘するとともに、個性が真に輝くための解決策を提示する。

今回取り上げる個性について、我々の認識を明らかにしておく必要があるだろう。通常、個性を自分らしさとも表現できるが、総じて、個性に関してはプラスイメージで捉えられている。教育においては、個性を伸ばすことが強調されているし、社会においても、個性を発揮することが大切と謳歌されている感がある。とくにヤング世代は個性に敏感であり、企業経営特に組織活性化にとって、個を活かすことは焦眉の的である。しかし、こうした認識にはバイアスがあり、個性には、プラス面だけではなく、マイナス面もあり、個性の全体像および本質が捕えられていない状況にあると考えられる。

我々の研究では、個性とは、これまでの先行研究の成果を踏まえつつ、生まれつきの性格 (属性) と後天的能力によって決定されるという仮説を立てる。具体的には、図1-1で示されているように、属性については、男らしさや女らしさといったジェンダーの違い (属性的個性) に焦点を絞ると同時に、後天的能力としては、自分軸と称される、自分の価値観および価値判断能力 (能力的個性) を中心に分析する。

図1-1. ジェンダーを含む属性的個性と能力的個性 (自分軸)

